



シール印刷の話

組合の紹介

北海道シール印刷協同組合は、昭和51年10月に道内でシール印刷業を行う事業者によって設立されました。主な事業は、組合員の事業に必要な資材の共同購買のほか、組合員の技術力向上や最新の印刷技術などを周知するための勉強会を実施しています。

シール印刷の歴史

シールの歴史は古く、古代エジプト文明において、紙(パピルス)のリボンを粘土で貼りつけて、公的な各種の文書、証明書などで署名の代わりとして使用されたのが始まりです。

近代に入り、諸外国では産業革命が進み、技術革新の競いの場として万国博覧会が世界各地で開催されましたが、1876年(明治9年)のフィラデルフィア万博において展示物をサポートするためにシールが使用されたのを契機に、広く普及しました。

日本で初めてシール印刷が行われたのは1912年(大正元年)、イギリス国王ジョージ5世の戴冠式が行われた際に、宮内庁の依頼で贈り物を封緘するための菊のご紋章のシールを作ったのが起源とされています。



世界初のシール印刷機

シールの構造

シールは、基本的に表面基材、粘着剤、剥離紙の3層から構成されており、表面に特殊な加工を施すなど、種類によっては4層になることもあります。シールを貼る場所の素材や粘着力の強さ、色、絵柄、加工など目的や用途によって数えきれないほど素材の種類と組み合わせがあり、その中からお客様の要望に沿ったシールを作ります。

シール印刷について

シールの印刷機は、印刷から加工までを一貫して行う点と、一般の印刷では4色印刷が多いですが、シール印刷は透明なものや金色など様々な色に対応する必要があるため、特色や多色印刷の多い点が一般の印刷と大きく異なります。また、印刷前のシールはトイレットペーパーのようにロール状に巻かれており、機械に流し、加工して再度巻き取ることで、連続して加工しやすいように工夫されています。

印刷方法は、凸版印刷やオフセット印刷のほかスクリーン印刷など、シールのサイズや素材によって変わりますが、最近はデジタル化が進み、インクジェット方式などの印刷機も普及し始めています。



最新のシール印刷機

身近なもので簡単にシールを剥がす方法!

商品に貼られたバーコードや、子供が貼ってしまったシールなどをきれいに剥がせず、不便を感じている方も多いと思います。剥がすために水でふやかすとシール表面の紙の部分は溶けますが、粘着剤は水に溶けずにベタベタと残るので、逆効果になります。

きれいにシールを剥がすには、ドライヤーを使用します。粘着剤は、熱を加えると柔らかくなり、剥がれやすくなる性質があるので、シールから5~10cmほど離れたところからドライヤーで温風を当てながら、少しずつゆっくり剥がすとベタベタも残らずにきれいに剥がすことができます。是非、お試しください。

より魅力ある業界になるために

シール印刷業界は、以前は3Kと呼ばれ従業員の離職率が高く、若者離れが進んでいたほか、近年はネット印刷通販の普及や資材費の高騰などで厳しい経営環境にあり、事業の継続が困難になってしまう場合や、後継者問題によって廃業を余儀なくされる企業も少なくない状況にあります。

しかし、印刷機械の進歩などで自動化が進み、職場環境の改善が急速に進んでいます。そのほか、本組合で各種勉強会の開催や情報提供、業界PRなどを積極的に行うことで、組合員の経営基盤を支援し、従業員が長く働ける環境を作り出し、業界をより魅力あるものに変え、シール印刷業界を盛り上げていきたいと考えています。

今回は、北海道シール印刷協同組合 代表理事 有原常貴氏よりご寄稿いただきました。ありがとうございました。